Blowers No. 2

めにう ～MENU～

3～6	PEACE PRESSER MAYA	文・本居こじ 絵・EPST DARIUS·5
7	「クレギオン」解説	空技廠横浜評議会
8・9	バトル・クラック緊急レポート	A. F. フィネクスレイ
10～12	真鶴学園風雲録　全体リプレイ 真鶴レポート	岬当麻
13～20	LOOK OUT！	EX. SYSTEM
21～24	Mental Ranger	文・長船吉光 絵・ただのりな
25	特口魂	空技廠横浜評議会

※今回は ただのりな さん多忙につき、コミックは休載させていただきます。
※「真鶴学園風雲録」に参加するためには、別売りのルールブック（送料込み２００円）が必要です。

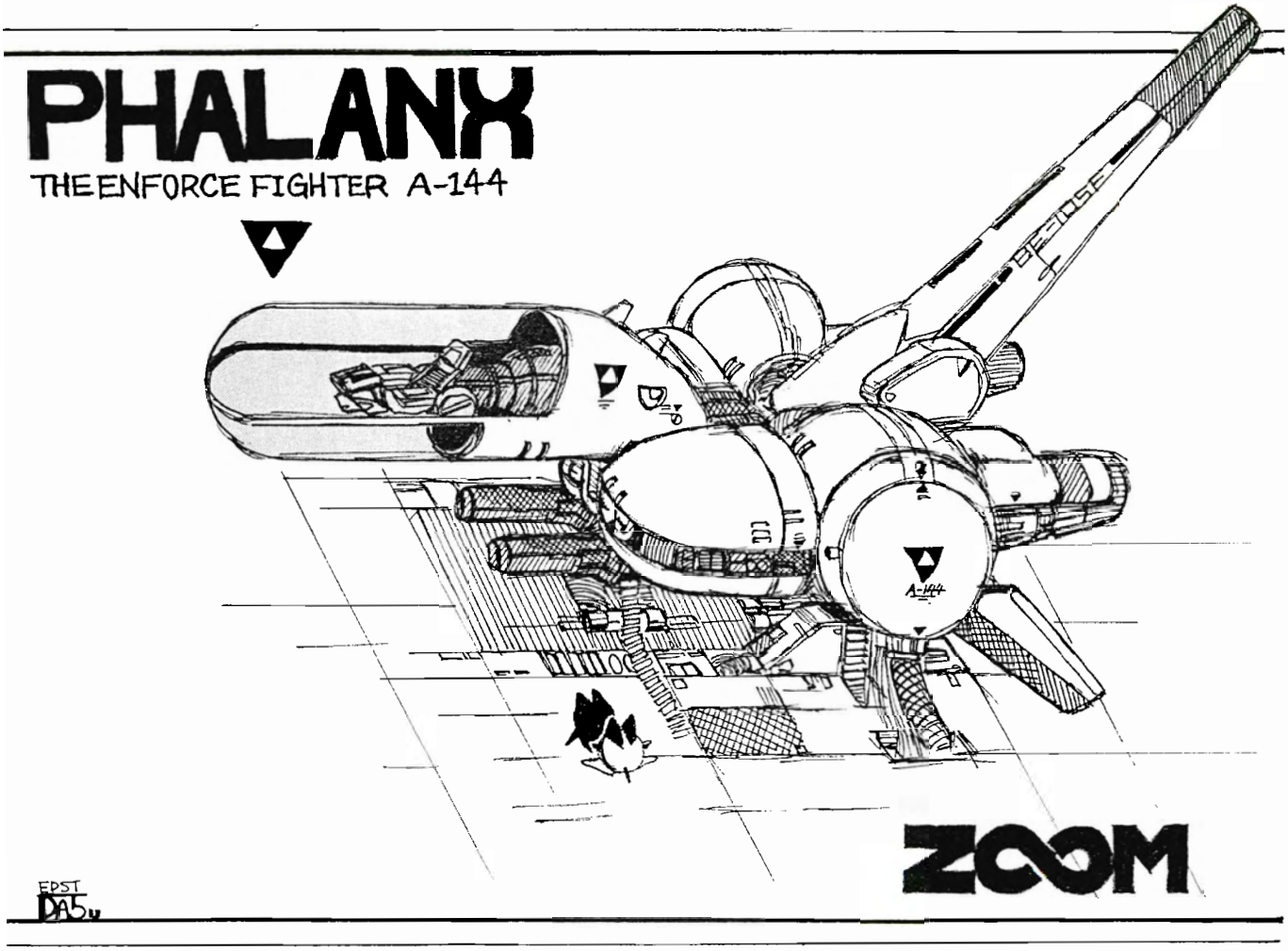
「わかばで悪いか！」　by 本居こじ

まず、初めに謝る。スマン！わかばはまずかった。

あれを出した後で、部活の先輩に「まずい」（ちなみにその人はジタン党）といきなり言われ、さすがに疑問を持った私は再びエコーと飲み比べてみたのだ。そしたら、これがハッキリまずいじゃないか。しかし、やはりあの暖色系のパッケージは夏場は避けたい。そこで妥協案をとることにした。かねていろいろから「うまい」と推奨の高かった「ピース」に転向することにしたのである。しかし「ショートピース」は両切りで、とても吸えない。３８の３．７だもの。で、私は「ＰＥＡＣＥ　ＬＩＧＨＴＳ」を選んだのである。聞けば歯に残り易いらしいが、でも、まあいいやね。私はそんなにHeavyじゃないし。歯はマメに磨く方だし。問題なのは値段。２０本２４０円て一のはちょっと、ね‥‥。（やはりどうも本質を外しているような気もする）

まあ、そういう訳で「わかば」は無理には薦めない。気が向いたら、吸ってみてくれ。

PEACE PRESSER MAYA



文・本居こじ
挿絵・EPST DARIUS・5

序：西暦２１２０年代の東京は酸性雨の濃度と回数が減り、「スピナー」と呼ばれるホバーカーが目立つようになった他は、２０世紀末とほとんど変わらなかった。極めて単純な形態のビルの群れの一部、新宿・池袋といったあたりには奇形的にその背を突き上げた前世紀のビルがなお散在し、四ツ谷・高田馬場のあたりではそれらの取り壊しがほとんど完了に近づいていた。その昔「天皇」とその一族が住まわっていた「皇居」は隣接する日比谷公園の隣接地として、また地球連邦の重要文化財として一般に公開されている。

世界は、既に宇宙に広がっていた。人類は亜空間航行技術、俗にいうワープ航法を手に入れた後、爆発的な勢いで未知であった空間を既知のものに開拓していった。それに伴う事故の方も回を追うごとに規模を大きくしていったが、人口増加率の方がはるかにそれを上回っていた。混血の増加が、さらに人口増加に拍車をかけていた。

その住人の大多数が純血であった日本列島も、今ではその面影も失せ、英語が若干変化した「共通語」の飛び交うところと化していた。人口の密集している東京では、それはなおさらだった。ただ、そうした流れに逆らい、順系の文化を守ろうとした一派がいたこともまた事実である。他の民族でもそれは同様であったが、地球に居残ったものの方がその傾向を強めていたようだった。しかし時間は流れ、彼らは次第に減少の一途をたどっていた。「古きよき時代」は流行と興味の対象へと変質していったのである。

１：最後まで高層化からは取り残された渋谷の飲み屋街の一角は、日暮れ時から勤め帰りのサラリーマンと爛につけられた酒の臭気でごったがえす。まさにそこは男の領域だったが、その奥の方、間口の狭いごくありふれた店からは、三十弱の若い女の歌声がもれていた。混じり気なしの日本語である。多少酔っているきらいはあるものの、手拍子皿拍子と混ざりあい、却ってそれがプラスに作用していた。

「赤いリンゴに　唇寄せて　黙って見ている青い空　リンゴは何も言わないけれど　リンゴの気持ちはよくわかる　リンゴ可愛いや　可愛いやリンゴ‥‥」

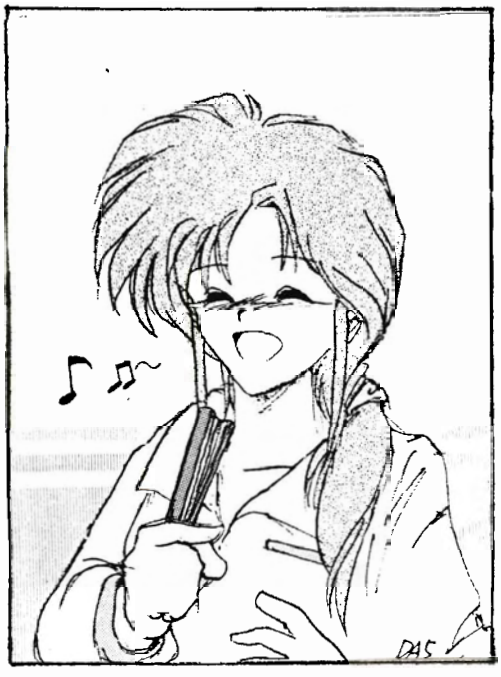
歌っている彼女以外は、どういう意味なのかまるで知らない。それでも、心の奥底に問いかける「何か」に促されて、彼女に拍子を合わせるのだった。その彼女は、狭い店の中、常連席になっている奥の方の通路に立ち、右手の扇子をマイク代わりにして歌っていた。長めの髪は濃紺のリボンで束ね、左の肩から前へ垂らしている。

桜田門に東京警視庁と合同庁舎を構えているＩＣＰＯ東京支部での仕事を終えた尼崎摩耶にとって、渋谷での一杯は精神安定剤だった。彼女がそこの刑事であることは店のおやじ以下常連全員の知るところだったが、ＩＣＰＯでは彼らの生活に直接のつながりがない。そのことが、摩耶をしてその飲み屋の常連に加わることを可能としたのだろう。彼女にエンターテイナー的才能があったことも理由の一つかもしれない。彼女は大学のころに２０世紀日本社会風俗史を専攻していた関係で、当時の大概の流行歌を日本語と共通語の両方で歌うことができた。「知らない歌を知らない言語で歌うことができる女刑事」は、ある意味彼ら常連たちの宝ともいえた。ただ、摩耶の方でも心得たもので、どんなに酒が入っても、一日一曲しか歌おうとしなかった。マイクを独占することは避けたのである。

今、夜の街は佳境に入ったばかりである。

渋谷から歩いて１０分とない青山あたりまで来ると、摩耶が行くような飲み屋は一軒も見当らなくなる。若者の集まるディスコと、青年成金の来るバーとが、ワンルーム・マンションの地下などにあるくらいだ。

そして、一流の上に「超」が付くようなバー、「オリスカニー」もそういった類の一軒だった。割に広めの店内には厚手の赤紫のカーペットが敷き詰



められ、ダークブラウンに統一されたその他の調度、白い天井の適当に抑えられた間接照明をサポートする机上のライトが、重厚感を醸し出している。蛍光灯が煌々と照らし出す摩耶の飲み屋とは月とスッポンだ。

そこへ、よく磨かれた真鍮を枠にひたすら透明なガラスを張ってある回転扉を押して、茶の混じったブロンドの女性が入ってきた。半地下になっているフロアへの小さな階段を下りると、クロークに革の小さなハンドバッグを預け、まっすぐなカウンターの中ほどに席をとった。客は他には４人ほどがテーブルで何か話し込んでいるだけである。カウンターには老練なバーテンが一人、クコークと奥の方に若いボーイが一人ずつ、そして隅のグランドピアノで落ち着いたソナタを静かに奏でる老ピアニスト。極めて落ち着いた空間だ。

「いつも通りに」

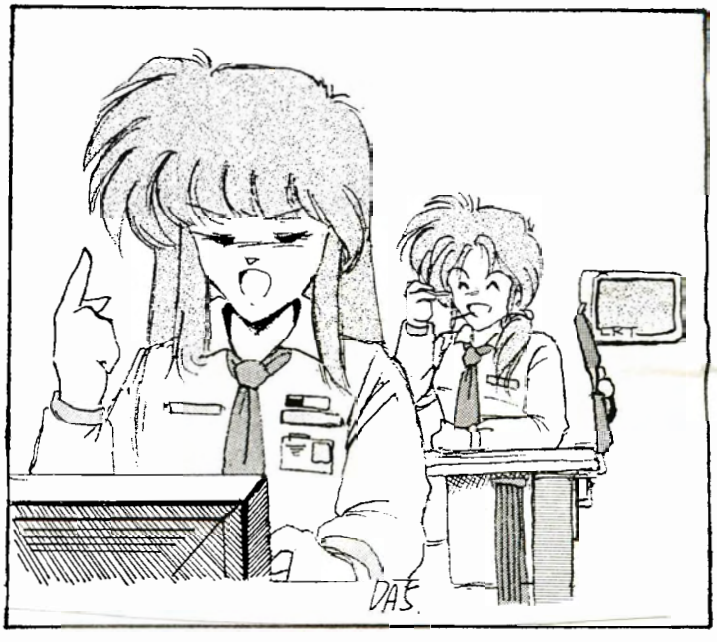
そう言いながら彼女は磁気チップを差し出した。うなずきながらバーテンはそれを取上げ、背後のボトルを一本選びとった。彼女のチップが差し込まれたボトルロックを兼ねる名札には、端正なロシア文字でこうあった。

ヤーニャ・モロフォビッチ

２：ＩＣＰＯは、インターポールとも呼ばれる。国際刑事警察機構条約に基づく国際警察であり、本部はルクセンブルグに在る。その職務もさることながら、組織全体としてカバーするエリアの問題から、ＩＣＰＯの全支部は２４時間態勢で開いている。

フリータウンのＩＣＰＯシエラレオネ支部も例外ではない。その情報端末で、小さいが後々重大な意味をもつ事故が発生した。一時的に端末が全てダウンしたのである。それはほんの１分前後のことだったが、多少知識の有るものならばそれが外部からの侵入によるものであることが分かっただろう。しかしあいにくその時、そこにはそこまでの事情通はいなかった。そして、この事故は「原因不明の停電」として処理されてしまったのである。

少し後、大気圏外の古いコロニーの中、仰々しいほどに大きな機械を前に、二人の中年を越えた白衣姿の男たちが話していた。



「部長」少し若く見える方が厳かに告げる。「パパ・ジュリエットが終了致しました」
「首尾は」
「キアサージ奴が少し手違いを起こしました。‥‥が、幸いにも足はつかなかった模様です」
「キアサージは始末しろ」「部長」は冷たく答えた。「急がねばならん‥‥ハンコック奴が逃げおおせ、あれが敵の手に渡ってしまった今となっては‥」
　無言で若い方がうなずく。
「急げ。一刻も早くあれを完成させるのだ」
「は！」男は直立不動の姿勢をとった。
「アイザックに栄光を！」

３：「何ですか、これは」
　いきなり突き出された書類の束に、摩耶は眉をひそめた。表紙には「極秘資料　第５７００２１４２号」とタイプされているだけだ。
「一週間前、地球に近い公海上で何物かに襲撃されたと思われる小型艇が、宇宙軍に救助された。しかし乗っていたパイロットは、既に死んでいた‥‥このディスクを手にしたまま」摩耶の上司、アルビオン・ブルワークは、透明なビニール袋に入っている黒くなった血のこびり付いているディスクをデスクの上、先程の書類の横に並べた。血に弱いヤーニャが息を飲む。「そして、そのプログラムリストがこれだ」
　アルビオンは言いながら件の書類の表紙に右手をかけた。
「はじめにこれらが持ち込まれたのは東京警視庁だ。拾った宇宙軍機は横田の所属だった関係でな」
「それが、どうしてこっちに」
　不満を露にしてヤーニャが反抗する。
「それはこいつを見れば分かる」アルビオンは表紙の上の、ありもしないほこりを払った。「事は一刻を争う。民間の連中も動きだしている‥‥とにかく早く、穏やかに解決しろ」
「イエッサ」
　気のない返事をしながら摩耶が書類を取り上げた。続いてヤーニャがディスクの入った袋を取ろうとしたとき、アルビオンはそれを押さえた。
「こいつは証拠物件だ。あまり使うわけにはいかん」彼は言った。「こっちを使え。コピーだ」
　アルビオンはそう言いつつ、新たなディスクを書類入れから取り出した。

「‥‥気に入らない」自分たちのブースの中で、ヤーニャは舌打ちした。
「このプログラム、絶対に裏がある」
「そこの“スプートニク”にチェックさせりゃいいじゃん」摩耶はその後ろで耳掃除しながら気楽に言った。「そうすりゃ一発だろうにさ」
　ヤーニャは色をなした。
「変なウィルスでも入ってたらどうすんのよ！スプートニクがそれでおシャカになったらどうしてくれるわけ？」
「あ、そうか」摩耶は耳かきをチリ紙になすり付けた。「なーる‥‥でもさあ、それじゃとっくにここの端末、全部感染してんじゃない？このプリントはお隣さんが作ったんでしょ？それにこのコピーソフトも‥‥うち、情報中枢は隣と共有じゃん」
「‥‥！」ヤーニャはハッとなった。
「‥‥あり得るわ。大いにあり得る」
　やにわに彼女は自分の割り当ての端末に飛びついた。これは彼女の私有コンピューター、“スプートニク”とは別個の官給品である。

　少しして、アルビオンがブースを訪れた。
「どうだ、具合は」
　彼がそう尋ねた瞬間、ヤーニャの端末は派手なスパークと破壊音を上げてぶっ飛んだ。残響未だ消えやらぬうちに、摩耶の端末も火を噴いて粉々に飛び散った。連鎖的に特捜班の室内の端末が、たて続けに破壊していく。数瞬のタイムラグで回路遮断装置が作動したが、遅かった。破壊は瞬時に±３フロアの端末全てに広がったのである。そしてその後には異常発生を告げるベルが、けたたましく鳴り響いているだけだった。———それが、摩耶のクォーツ式アナログ腕時計が２時半を少し回った時のできごとの、全てだった。
（続）

「クレギオン」解説

空技廠横浜評議会　編

「クレギオン」という名前は、大概のゲーム誌で去年秋口に大きく広告が出たので、皆様御存知でしょう。しかしその実態は‥‥となると、知らない方も何人かおられるのではないでしょうか。宇宙を舞台にしたＳＦネットワークＰＢＭということは知っているとしても。‥‥今回はそんなある読者の方からの指摘により、「クレギオン」のレビューをやってみます。確かに広告は「クレギオン」の結果誌とうちのＰＢＭにしか出していないということもあって、その辺は半ば盲点になっていたのですが。

このＰＢＭは、今からおよそ３０００年ほど先の時代を取り扱っています。しかし技術レベルはそれほど進歩していません。私たちがよく目にする、２１～３世紀ごろのと大差ありません。‥‥逆にいくつかの点では、遅れていると言ってもいいくらいでしょう。地域の方は、地球からはるかに（そりゃもうムチャクチャに）遠い「辺境宇宙」と呼ばれるあたりです。設定書によれば、その「地球から遠い」ということも、技術レベルの問題の一つの要因となっているようです。ただし、最も大きな要因は、少し昔あったとされる大きな惑星間戦争が原因とされています。この段階で危険なまでに奇形的進化を遂げた科学技術の一部を封印した、ということだそうです。

ゲームエリアは２００光年四方ぐらいに切り取った宙域です。世界設定は、‥‥そうですね、西部劇の炭鉱町と、革命時代のロシアと、インドとナチスドイツを、適当にツモってパッチワーク状につなぎ合わせたもの、とでも言えばいいでしょうか。とにかく一言では言い表せません。

要はこのワールドのどこかに隠れている「アーケイディアの謎」というものを探し出して、どうにかすればいいわけです。ゲーム終盤の現在、どうやら「アーケイディアの謎」そのものは見つかったようです。私たちは直接接触している訳ではないので、詳しいことはわからないのですが。

ＳＦというよりも、一つのコミカル英雄伝（例えて言うなら銀英伝）と言った方が近いでしょう。展開が落ち着いていて、我々の日常生活の視点からも受容し易いという点で、遊○体の某新ネットＰＢＭ（とりあえず参加してますケド‥‥ね）より受け入れ範囲の広いゲーム、つまり我々空技廠内で言う「いいゲーム」だと思います。ただし、ハチャメチャな展開を求める方には少々物足りないかも知れません。

未参加の方には残念なことに、このシナリオは既に募集を締め切っています。９月１０日に最後のアクションを締め切るので、実際今から参加しようとしても文字通り何も出来ませんが。スタッフ構成というか、質は安定していますので、シナリオ２があったら「クレギオン」でなくても参加してみる価値はあるでしょう。

以上、空技本部で一番まともにテーブルトークＲＰＧができる、香津美どぶろくがお送りしました。これでいいですか、提督？

㊸：ダンケ。助かりました。

バトル・クラック緊急レポート　第2回

by　A．F．フィネクスレイ

さて、フィネクスレイが人形に仕立てあげられたその夜、格納庫では…。

ﾌｨﾈｸｽﾚｲ「……うーん、あれ、ここは？…そーだ、確か誰かにラリアートをいきなり食らってそのまま気を失ってしまったんだ。まったく乱暴だなー。確か女性だったような気がしたけど…。もう９時４２分か、７時間も気を失っていた訳か、結局インタビューできなかったな。……あれ、誰かがまだ作業をしているぞ。おーい、そこのお人。

走って近づくフィネクスレイ。

ﾌｨﾈｸｽﾚｲ「あのー、ネットプラスの方ですよね。何をなさっているのでしょう。

謎の人物「……

ﾌｨﾈｸｽﾚｲ「何か変わった物をマシンに取り付けているようですが、何です、それ。

謎の人物「……そんなに知りたいかい？（不気味に）

ﾌｨﾈｸｽﾚｲ「あ、も、勿論ですとも。

謎の人物「じゃあ、耳を貸しな。（耳を貸すフィネクスレイ）実はね…

ここで男は（この時初めてこの人物が男性であることが分かった）フィネクスレイの耳に息を吹きかけた。

ﾌｨﾈｸｽﾚｲ「わっ、いきなり何をするんです。

謎の男「ふっふっふっ、今時こんなのに引っ掛かるとは、やーい、間抜け、間抜け。

ﾌｨﾈｸｽﾚｲ「何をいきなり。それよりあなたは何者なんです。

謎の男「ふっふっふっ、では教えてやろう。私は初代ネットプラス、リーダー兼メカニックの八神　英であーる。

ﾌｨﾈｸｽﾚｲ「あ、あなたが、あの現代の岸田博士といわれる八神　英さんなんですか？

八神「いかにも私が現代の岸田博士こと八神　英であーる。

ﾌｨﾈｸｽﾚｲ「そういえば、八神さんは一時期姿を眩ませていたようですが、どうしていらっしゃったのですか？

八神「ん、知りたいか？知りたければ、ほれ、耳を貸すがよい。

ﾌｨﾈｸｽﾚｲ「そんなこと言って、又息を吹きかけるんでしょう。もう引っ掛かりませんよ。

八神「２度も同じことをするか。私は２度も同じことをするほど馬鹿ではないぞ。

ﾌｨﾈｸｽﾚｲ「では、今度は耳を噛むとか？

八神「うっ（何故分かったんだ）、まっ、まさか、そんなことする訳ないぞ。

ﾌｨﾈｸｽﾚｲ「そうですか。（何か怪しいなー）

八神「実はなー…。　**わ　っ　ー**

フィネクスレイは耳を痛めた…かに見えたが、そこにフィネクスレイの頭はなかった。

八神「はれっ？

ﾌｨﾈｸｽﾚｲ「ふっふっふっ、２度も引っ掛からないと言ったでしょ。

どうやら屈んでいたようだ。

八神「お主、出来るな。よし、では教えてやろう。それはな……秘密だ。

ﾌｨﾈｸｽﾚｲ「えっ

八神「だから、ひ・み・つ、なのだ。

ﾌｨﾈｸｽﾚｲ「ここまで引っ張っておいて秘密ですか。

八神「そっ、ここまで引っ張っておいて秘密なのだ。

ﾌｨﾈｸｽﾚｲ「いったいこの１ページは何だったんだ…。

八神「ま、いいじゃないかい。そのうち分かるって。

ﾌｨﾈｸｽﾚｲ「そのうちっていつなんです？

八神「第４戦だな。

ﾌｨﾈｸｽﾚｲ「えっ、第４戦っていったらもうすぐですよ。

八神「そうだな。それよりもこいつを取り付けるのおまえも手伝え。

ﾌｨﾈｸｽﾚｲ「えっ、あ、はい。
　そのころ格納庫の外では。
ﾕｷ「あれ、格納庫明かりが付いてるよ。
ｼﾞｭﾝﾅ「本当だ。今は誰も使ってないはずなのに。
ﾁｪﾘｽ「昼間は痴漢だったが今度はコソ泥かー？行ってとっ捕まえてやる。
ｱｲﾌ「でもチェリス、コソ泥だったら普通明かりは付けませんよ。
ﾁｪﾘｽ「なんだとー
ｱｲﾌ「だからね、そのー、ね、シャルルさん。
ｼｬﾙﾙ「そうですね、やっぱりコソ泥ではありませんよ。チェリス。
ﾁｪﾘｽ「じゃあ何だって言うんだい。
ｼｬﾙﾙ「それを今から調べに行くんですよ。ねーおユキさん。
ﾕｷ「えっ、じゃあシャルルさん先頭ね。
ｼｬﾙﾙ「では早速覗いてきましょう。……うむ、どうやら二人居るようですね。二人とも男ですね。一人は作業服を着ていて、もう一人の方はどうやらスーツのようです。なにやら作業しているようだがどうするね？
ﾁｪﾘｽ「突撃あるのみー！！
ｼﾞｭﾝﾅ「チェリス、落ちついてよー。みんなで話し合って決めよ、ね。
ｼｬﾙﾙ「では、どうするね。
ｱｲﾌ「やっぱりここは、そこで何をしているのかなっ、て聞くのが一番なんじゃないかなー。
ﾕｷ「そうですね、それがいいですよ。
ｼｬﾙﾙ「では、……そこの二人、何をしてだい。
ﾌｨﾈｸｽﾚｲ「あっ、えっと、初めまして、私、昼間伺いますって連絡したフィネクスレイです。
ﾕｷ「あぁ、フィネクスレイさん、どうしたんですこんな時間に。
ﾌｨﾈｸｽﾚｲ「実はですね…（今までの経緯を話す）
ﾕｷ「そうだったんですか、どうもすみませんでした。ダメじゃない、チェリス。謝りなさい。
ﾁｪﾘｽ「…悪かったな。
ﾌｨﾈｸｽﾚｲ「（ユキさんて優しいんだなぁ…）←全く聞いていなかったりする
ﾁｪﾘｽ「…（人が謝ってるのに聞いてねえとは、一発殴ってなろか）
ﾌｨﾈｸｽﾚｲ「…あっ、ところで皆さん。早速お伺いしますが、今回何か新しく開発なされたことあります？
ｼｬﾙﾙ「そうそう、実は前回もちょっと触れたが、画期的なプログラムが出来たんですよ。それはね、予めにコースのデータをＮＣＳＰに登録しておき、そして各ライダーに各マシンに乗ってもらいコースを走りこんでもらう。この時ＮＣＳＰにライダーの走りが記録される。これによりＮＣＳＰはライダーの次の行動が分かるため、ライダーにすばやく反応してくれるのです。ただし、このプログラムはライダーの動きに反応するだけですから、ライダーが行動しようとしない限りなにも起こりません。後もう一つ、状況を判断してくれるプログラムもあります。これは、周りの状況を読み取ってそれを分析し、最良の行動を示してくれるというものです。こちらを行うには、マシンの各場所にセンサーを取り付けなければなりません。後、データを投影するためのスコープを、ヘルメットのバイザーに取り付けてもらうことになります。多少視界は狭くなるでしょうが、我慢してください。以上です。

さあ、シャルルの画期的なプログラム、果たしてどんな結果に。隣で黙々と作業を続ける八神。みんなもう彼の存在を忘れてしまったのか。又、八神の秘密兵器とは如何に。いろんな謎を残しつつ次回へ続く。

真鶴レポート

潮騒さわぐ真鶴の町――――
その外れに、真鶴学園はあった！（何が言いてーんだ、コラ！：宇垣）

彼らが男子部事務棟前に集まったのは、朝十時ごろのことである。実は真鶴駅前のバス停で３０分に一本のバスを待っている間に、互いの存在を意識してはいたのだが、ただ、なんとなくきっかけがつかめず、声はかけられなかったのである。
女の子もいる。入寮手続きなど、大概の事務は男子部敷地内の本部事務棟に集約されているからだ。学割発行、郵便受付、その他日常しばしば利用する業務は女子部内の分室でも行ってはいるのだが。
みんな思い思いの服装だが、真鶴の制服を着ているものはまだいない。男子の黒詰襟または紺ブレザー、女子の紺ブレザーまたはセーラー服―――もっとも、今は夏服になるから上着とネクタイはなくなり、セーラー服も上が白くなる―――は、今日の夕方、寮の自室にて交付されるからである。
小さな待合室で一番先に口を開いたのは、若草色の半袖コットンシャツにレモンイエローのスカートといったいでたち―――彼らの中で一番派手な色彩だった―――の女の子である。軽い調子の標準語だった。
「どっからきたんですかぁ？」
目があった開襟シャツ姿の少年―――胸についているマークから言っても、出身中学のものだろう―――は、一瞬途惑いつつも、しっかり答えた。どこか東北風の訛りが感じられる。
「秋田から。昨夜の夜行できた。菅原絵馬って言う。よろしく」
「絵馬クンね、私初雁つばめ。横浜から来たの。‥‥夜行ってさぁ、『あけぼの』じゃないの？」
「あ‥‥？ああ」菅原は早くも完全に初雁のペースに乗せられている。「何で‥‥」
「鉄道好きなのよね。交通研に入るんだ♡」
「‥‥」
絶句する菅原を尻目に、初雁は次の者に狙いを移した。やはり出身校のものであろう、白いセーラー服のその少女はうなずいた。
「あなたは？」
「‥‥和歌山。今朝‥‥」
「わかった。始発の普通で、新大阪から小田原停車の『ひかり』に乗り継いだでしょ？」
「‥‥あたり」
「名前は？」
「坂井。坂井法子」
「ふうん。どっかで聞いたみたいな名前ね、ある意味、俗じゃない？」
言うだけ言って、彼女はさらに狙いを移した。どうやら中学生らしい。
「あーんど、はうばうちう？」
「？？？？？？」
彼女は鳩が豆鉄砲を食ったようになってしまった。無理もない、まだ英語は習っていないのだから。くつくつと声を抑えて笑いながら、初雁は言い直した。
「あなたは？」
「井村真知子です。瀬戸市から来ました」
「ふうーん」
面接のときも同じ口調だったのではないか。とすれば、この子相当な「いい子」タイプね。初雁は値踏みした。
‥‥と、不意にである。

「おい、よせ、死ぬ気か！」
　全員の視線が集中した先には、学生服の上にうす汚れた白衣をはおり、全体の中でも浮いた存在となっていた少年の右手をつかむ、真鶴の高２生がいた。彼の方は四角い眼鏡をかけていて、いかにもまじめそうな老け顔が過分に印象的である。いつ現れたのだろう。
「そいつは金属カリウムだろうが。ビーカーの中は水だな」
「大丈夫ですよ、ちょっと光るだけです」
「ザケんな！男子化学部長をナメんなよ！」彼は烈火のごとく猛り狂い、白衣男から白い固体をむしり取った。「こんなもんそん中ぶち込んでみろ。一気にカリウムが破裂しながら飛び出して、その飛び出したのが更に弾け散り続けるぞ。おめえがケガるだけならいいが、他の奴まで迷惑かけんな！‥‥それに、片付ける整美委員の身にもなれよ！」
「どうしたの、一体」
　表玄関から、セーラー服姿の生徒が表れた。やはり高２だが、こちらはずっと開放的そうだ。
「ああ、このバカが」彼はまだ白衣の袖をしっかりつかんだままだ。「一騒動やらかしかけた」
「まあ」彼女はやや大げさに驚いた。「やめてね、そういう———」
　彼女は肩に手をかけて静かにさとしたが、次の瞬間、全体の気温が急低下した。彼がジンマシンをびっしりと浮かべて、気絶してしまったのである。キョトンとなって見つめあう二人。数秒の空白があって、それから動きが出た。
「委員長、私が保健室に連れてくから、こっちの方よろしく！」
　彼女は、白衣男のジンマシンが刻を追うごとに倍加していくのにもかかわらず、しっかりと抱き上げてその場から走り去った。
「———、俺は今言ったように男子化学部長にしてェ、本年度新入生歓迎委員会長のォ、御手洗　東司（みたらい　とうす）だ。今のは副委員長の栗田　榛名だ」御手洗は手を後ろに組んで多少いばった様子で、そう名乗った。「これから必要な手続きについて案内するから、俺についてくるように。以上。‥‥ほれ、みんな立って」

　かくして、彼ら編入生の真鶴における、おそらく波乱に満ちるであろう学生生活は、第一歩を踏みだしたのである。

今回のＰＣ
高校　男子部　普通科
　　Ａ組　影山　翔　　勝　譲二
　　理数科
　　Ｈ組　菅原　絵馬　　沖田　悟
　　女子部　普通科
　　Ａ組　坂井　法子　　初雁つばめ
中学　女子部　Ａ組　井村　真知子

その他のリアクション
・影山翔
　ボクシング部に入部。寮内で空手部員を一度に三人のし、便所／風呂の罰掃除二週間。この間ブルーレットにバスクリンを混入しため、便所掃除を更に一週間延長。
　模型部ＭＦでは女子部領空を侵犯。持ち込みのジャギュアで、演習中の艦隊に向けてロケット弾を発射（命中０）したため、機体差し押さえ２ヵ月の上、反省文提出。機体は川崎Ｔ－４に代替。風紀委員の高２生同乗で一日１時間飛行が条件。

・勝譲二
　放送委員会で「昼休み放送」中、無届でワーグナーの「ニーベルングの指輪」を流した

ため、反省文原稿用紙３枚。内容が不適切だったため、教員室のお茶汲み３日間。模型部はＭＳ管制班。入港管制所のオペレーター。

・菅原絵馬
剣道部に入部。模型部ＭＳでは重巡洋艦「カンバーランド」（艦長　高２、前田昭次）の砲術係。

・沖田悟
多少モメたものの、化学部に入部。御手洗部長の立会いのもと、先の「カリウム実験」を無事行う。模型部ＭＳでは軽巡洋艦「昇竜」（艦長　高１－内部生、真田聡）の砲術係。

・坂井沄子
陸上部に入部。模型部ＭＦではＦ／Ａ－１８Ｃを持ち込んだことが先輩の不興を買い、シーハリアーＦＲＳ．３を割り当てられる。乗組み空母は初雁つばめの「ＣＶＥ－２」。因みに、外部高１の平均的な線はＦ－５です。内部だとＦ－４ないしＦ－１８ですが。

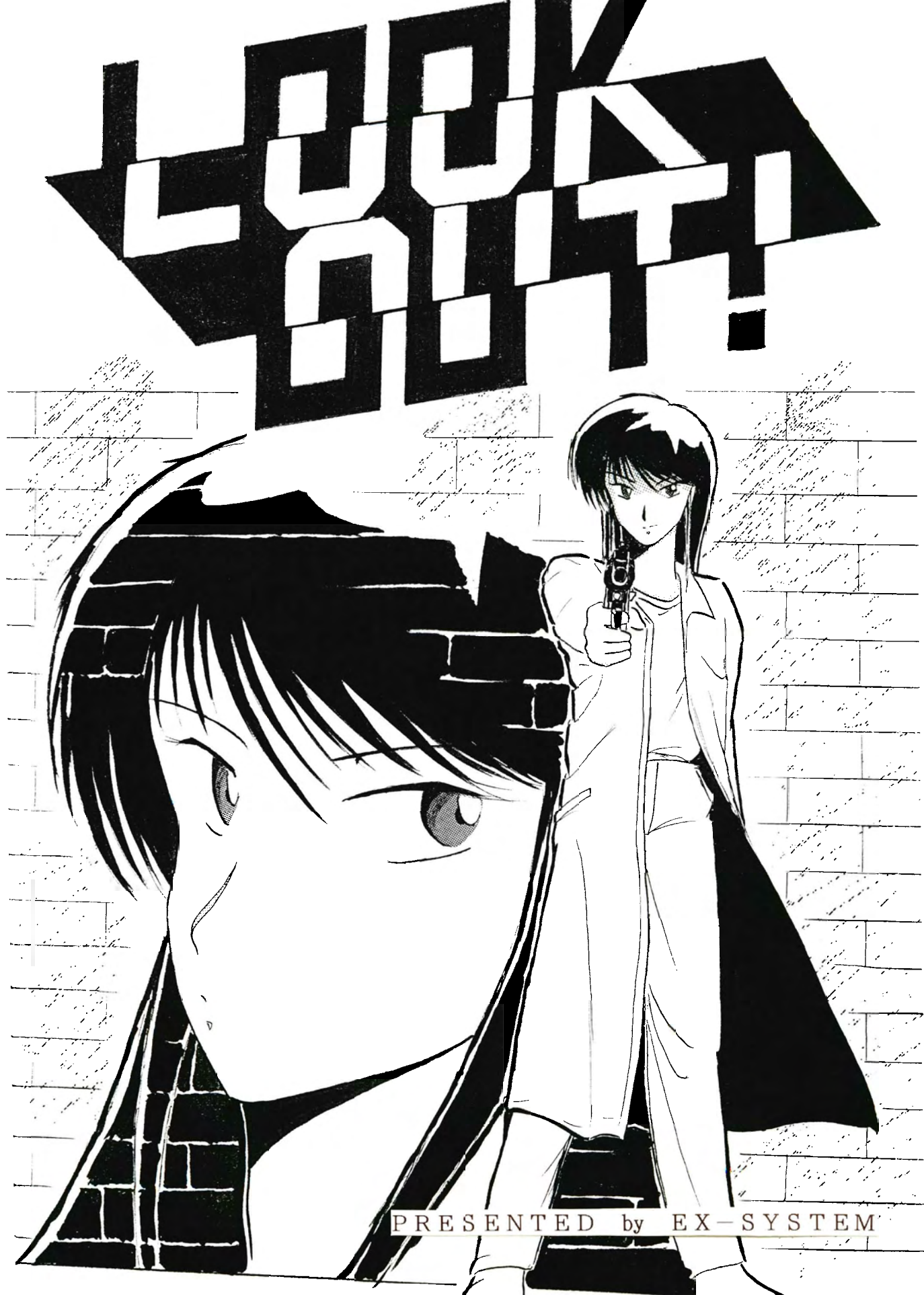
・初雁つばめ
交通研究同好会に入部。「男子・女子部校舎間を地下鉄で結ぶ会」の活動員となる。模型部ＭＳではＶ／ＳＴＯＬ空母「ＣＶＥ－２」艦長（できれば命名して下さい）。

・井村真知子
絵画部に入部。模型部ＭＳでは補給艦「ＡＯＥ－３」艦長（できれば命名して下さい）。初雁つばめに「男子・女子部校舎間を地下鉄で結ぶ会」のポスターを頼まれるが、態度を保留にする。

知ってて得する（かどうかは「？」）真鶴豆知識
・内部生・外部生…中学から真鶴にいる生徒は「内部生」、そうでないものは「外部生」。学校の事務扱いの差はないが、組分けなど、細かいところで区別される。模型部内では内部生の方が圧倒的優位。
・寮内の罰…便所掃除／風呂掃除が最も重罰。最高で二週間である。最も軽いものは舎監の肩もみ。中間は重い方から「ゴミ集め／焼却」「玄関掃除」「お茶用意」である。
・校内の罰…やはり便所掃除が最も重罰で、「玄関掃除」がこれに続く。「放課後校庭１０週（一周正１００ｍ）」「教員室のお茶汲み」と続き、最も重くて二週間。一番軽いのは「反省文提出」で、これは日数でなく内容により、担任が判定する。

校長から

とりあえず今回はこんなもんです。初雁つばめは、ＰＣですが今回前半部の中心に据えさせてもらいました。でないと書き出しが出来ないから。皆さんもも少し行動についてはいろいろ書いて下さいね。まあ今回は仕方ないにせよ‥‥特に男子！性格なんかについての設定が抽象的すぎて、やり辛いったらないです。その点でＨ組の沖田君（例の白衣カリウム男）のはナイスです。女性に触られるとジンマシンが出る、入学式（編入なので手続きの待ち合い時、と読み変えました）でビーカーの水にカリウムの塊を放り込む（良い子のみんなはやっちゃダメだからね）、その他使えそうなことをいろいろ書いてくれました。あと、今後のアクションはレポート用紙に書いて下さい。上の余白にあなたとキャラの名前を書いて、ね。参加料は無料です。「参加費泥棒！」と罵倒されるより、「安かろう、悪かろう」と呆れられた方が気が楽ですから。
次回は文化祭です。各サークルで何をするかは、理事長に私信で書いてもらいました。
あと、「出席番号」は当分使わないことになりました。


LOOK OUT!
PRESENTED by EX-SYSTEM

１．プロローグ

惑星「ティラノス」。蠍座アンタレス星系にある惑星国家である。レベルＣクラスの発展途上国であり、先進国の大企業にとっては新開拓すべき市場であった。

その企業の中でも地球に本社をおく「Ｕ＆Ｋカンパニー」はかなりの大企業である。惑星開拓用建設機材の販売や、その他各種業務を持ち、新開拓された惑星には必ずといって良い程進出する企業であった。

レイモンド＝ニクラウス（４８）は、このＵ＆Ｋカンパニー・ティラノス支部の支部長である。ここに入社して２５年、苦節の末に支部長の座を手にした彼は今、最高の気分だった。家族も皆、この星に連れて来た。開発途上国の利点である土地の安さを利用して郊外にテラでは考えられないような豪邸を建てたのも、家族のためであり、自分の成功を誇示するためであった。まさに全てが幸福と優越感の中にあった。

その日も、いつものように妻と娘とメイドに見送られ、運転手付きの会社のリムジンで彼は家を後にした。早朝に家を出るのは彼の癖であり、それが他の社員からも好かれる理由の一つだった。

「支部長、一つお伺いしてよろしいですか？」

「何だね、ヘンリー」

彼は８人いる会社の運転手全員の顔と名を覚えていた。こういった細かいところに気を配るのも彼の性格だった。

「なぜ支部長はボディガードを御雇いにならないんです？こういう発展途上国はテロやゲリラが多いと聞きますが‥‥」

ルームミラーにうつる神経質そうなブラジル系の男の顔を見ながら、レイモンドは笑った。

「なぁに、この国は平和だよ。君が思う程治安はひどくない。それに、そんな輩がいるなら、とっくの昔に私の命なんぞ無くなっているよ。そうだろう？」

ふと、彼は前方の交差点の向こうから来るトラックを見つけた。

「珍しいな、こんな時間に」

ただでさえ交通量の少ない郊外の道である。早朝ともなればなおさらで、彼はここ数週間はこの時間に他の車をこの道で見たことがなかった。

「珍しいですね、本当に」

道路の右側を走っていたリムジンは、進路を右側に寄せ、ゆっくりと交差点に向かった。トラックは直進するらしい。リムジンは減速し、交差点に入る。と、突然トラックが加速した。

「危ない！」

ヘンリーがとっさにハンドルを切るが、トラックはリムジンのフロントノーズに激突、リムジンは脇の土手に乗り上げ、止まった。

「支部長、伏せて！」

ヘンリーは懐から護身用のレイガンを取り出す。

トラックの荷台から数人の男が降りて来た。手にはＳ．Ｍ．Ｇ．らしき物を持っている。

ヘンリーはなんとかエンジンを再始動させようと努力したが、点火系かエンジン自体にダメージが及んだらしく、エンジンは動かない。

「支部長、こうなったら連中が諦めるのを待つしかありません。大丈夫、この車の防弾は完璧です。あんなＳ．Ｍ．Ｇ．程度じゃ壊れやしません。じきに奴等諦めますよ」

確かにヘンリーの言う通り、このリムジンのボディにはカウンター・テロリズム用

の強化処理が施されており、レーザー反射皮膜を始めとする完全防弾を備えていた。
外で連中がなにか話しているようだが、中の二人には聞こえない。しかし、リーダー格らしき男がニタリと笑ったのをヘンリーは見逃さなかった。
「やれ」
男の口がそう動いた。
直後、男たちの持つＳ．Ｍ．Ｇ．がいっせいに火を吹いた。
その瞬間、ヘンリーは自分の考えが甘かったことに気付いた。リムジンの運転席を集中的に狙った銃弾は、防弾ボディを貫き、ヘンリーの身体につき刺さっていた。
「なぜ……そんな……」
彼には、懐から取り出したレイガンを構える暇も与えられなかった。
「ヘンリー！」
レイモンドは血塗れのヘンリーと近付いてくる男たちを見ながら、
「こんなことなら、ボディガードを雇っておくべきだったな。無事に戻ったら、早速一流のボディガードを雇おう」
と考える自分に気付いた。
無事に戻れる保証など、何処にもないのに。

２．作戦指令　コード００７６　「人質の奪回、並びに関係者のガード」

「以上が事件の経過、並びに今回の任務だ」
「Ｄ．Ｓ．Ｓ．」に依頼が来たのは、惑星ティラノスにおける「Ｕ＆Ｋカンパニー支部長誘拐事件」発生から一週間後の事だった。
「Ｄ．Ｓ．Ｓ．」とは、地球に本社をおく「ドニエラ重工業社」の一部門である。元々は本社製品、特に軍用品の輸送を目的として開設された部門であったが、民間、公共の輸送社の充実に伴いその業務を拡大、「ドニエラ財団」のバックアップのもと、本格的なセキュリティ・サービスとなったのである。政界、財界、外交その他に大きな影響力と信用を持つドニエラ財団と、銀河連合内第５位、テラにおいては最大の技術力、生産力を誇るドニエラ重工のバックアップを受けたＤ．Ｓ．Ｓ．は、任務成功率９９％という輝かしい実績のもとに、銀河連合内にその名を轟かせていた。とは言っても実際に彼等のことを知っているのは過去にガードを受けたＶ．Ｉ．Ｐ．とテロを阻止されたテロリスト達ぐらいであり、民間にはその名や存在は余り知られていない。
「で、だ。Ｕ＆Ｋの方としては余り事を公にしたくないらしい。というのもマスコミに嗅ぎ付けられて下手に騒がれると後々ますい事になるんでな。お前たちも判ってるだろう？」
Ｄ．Ｓ．Ｓ．の責任者であるマイヤー＝ラインフィールド主任は「事を公にしたくない」のところを特に強調して言った。
「で、ゆうことは隠密行動取れっちゅう事やね？」
ラインフィールドの正面に立っている筋肉質の大柄な青年が言った。Ｄ．Ｓ．Ｓ．のメンバーの一人、ショウ＝アイザルである。
「そうだ。前にも言ったが……」
「でもさ、あたしたちの行動ってどう見たって隠密じゃないわよね」
ショウの右どなりに立つ小柄な娘が話をまぜっかえす。
「大体あたしたちに隠密なんて似合わないのよ。今回の任務だって、人質の救出はまだしもボディガードなんてこそこそする必要なんてないじゃない。ショウだってそう思うでしょ？」
「いや、似合う似合わんの問題や無いと思うんやけど……」
身長２ｍを越える大柄なショウと、１５０ｃｍそこそこの小柄な娘―――Ｄ．Ｓ．Ｓ．のメンバー、ジュン＝トアリム―――のやり取りを見ながら、ラインフィールド

は大きな溜息をついた。
５０ｃｍの高度差をはさんで口論する二人と、それをぼーっと見ているもう一人のメンバー、エミ＝アウルドテラ。この光景を見たらテロリストたち———特に彼等によって目的を阻止された連中はどんな顔をするだろう。
任務成功率９９％は確かに事実である。が、そのうちの７０％は全く予定外の行動であり、成功したのが不思議なくらいの、幸運の、いや悪運の強さによる産物以外の何物でもないような物ばかりなのである。
———始末書に追われる私の身にもなって欲しいものだよ
そんなことを思いながらラインフィールドがこの状態をどうやってまとめようかと考えあぐねていたとき、最後の一人が口を開いた。
「主任の考えはジュンの考えとは違うよ」
ジュンとショウの口論がぴたりと止み、その場に居る全員の視線が一方に集中する。
「今回の任務において、隠密行動———と言えるかどうかは知らないけど———を取る必要が有るのは、この事件のことをマスコミに嗅ぎ付かれて騒がれれば、焦った犯人が人質を始末する可能性が有る。ことに今回のケースは警察力の弱い所で起こった事件だから、人質を殺して死体を何処かに処分してしまえばそれで全ては闇へと葬られる。そういう最悪の事態だけは避けねばならないし、Ｄ．Ｓ．Ｓ．が動いたのもそのためである。そういうことでしょう、主任？」
一番端に立っている人物———長い漆黒の髪と華奢な体つきの人物は、その外見からは想像もつかないような存在感を持っていた。
それもそのはず、この人物こそがＤ．Ｓ．Ｓ．のリーダー、ユウ＝アッシャーなのであった。付け加えるならば、彼は男性である。
「そういうことだ。さすがはリーダー、締めるところはきちんと締めてくれるな」
ラインフィールドは嬉しそうな顔で言った。今日はなんとかまともに、気持ちよくブリーフィングを終えられそうな、今回の任務は余計な事無く、無事に終わってくれそうな、そんな予感がした。
「だから・・・・・・」
ユウが再び口を開く。
「マスコミにさえ嗅ぎ付けられ無きゃいいわけ。それさえクリヤーすれば、少々派手にやったっていいんじゃない？それで事がややこしくなっちゃったら、そん時ゃ後始末お願いね」
そういってユウは悪戯っぽく笑う。普通、男がやると気色悪いだけの仕草なのだが、ユウがやると妙にハマッている。
「・・・・・・」
甘かった。こいつら相手に期待を抱いたのが間違いだった。
ラインフィールドの頭の中でさっきまでの甘い予感が轟音を立てて崩れ去った。
「呪われてる・・・・・・」
ラインフィールドは、最近とみに薄くなった頭を抱えながら、いつもの、このブリーフィングを締め括る台詞を言った。
「なにか質問は・・・・・・ないな？」
４人は元気よく答えた。
「Ｙｅｓ，Ｓｉｒ!!」

３，毎度ながらの嫌な予感・・・・・・
(REPORTER:ユウ)

いつものように頭を抱え込む主任を尻目に、俺たちは本社敷地内の専用宇宙港へと向かった。いつもながら主任には悪いとは思うんだけどね・・・・・・あの人が胃潰瘍になったり円形脱毛症なんかになったとしたら、確実に俺たちのせいだね。

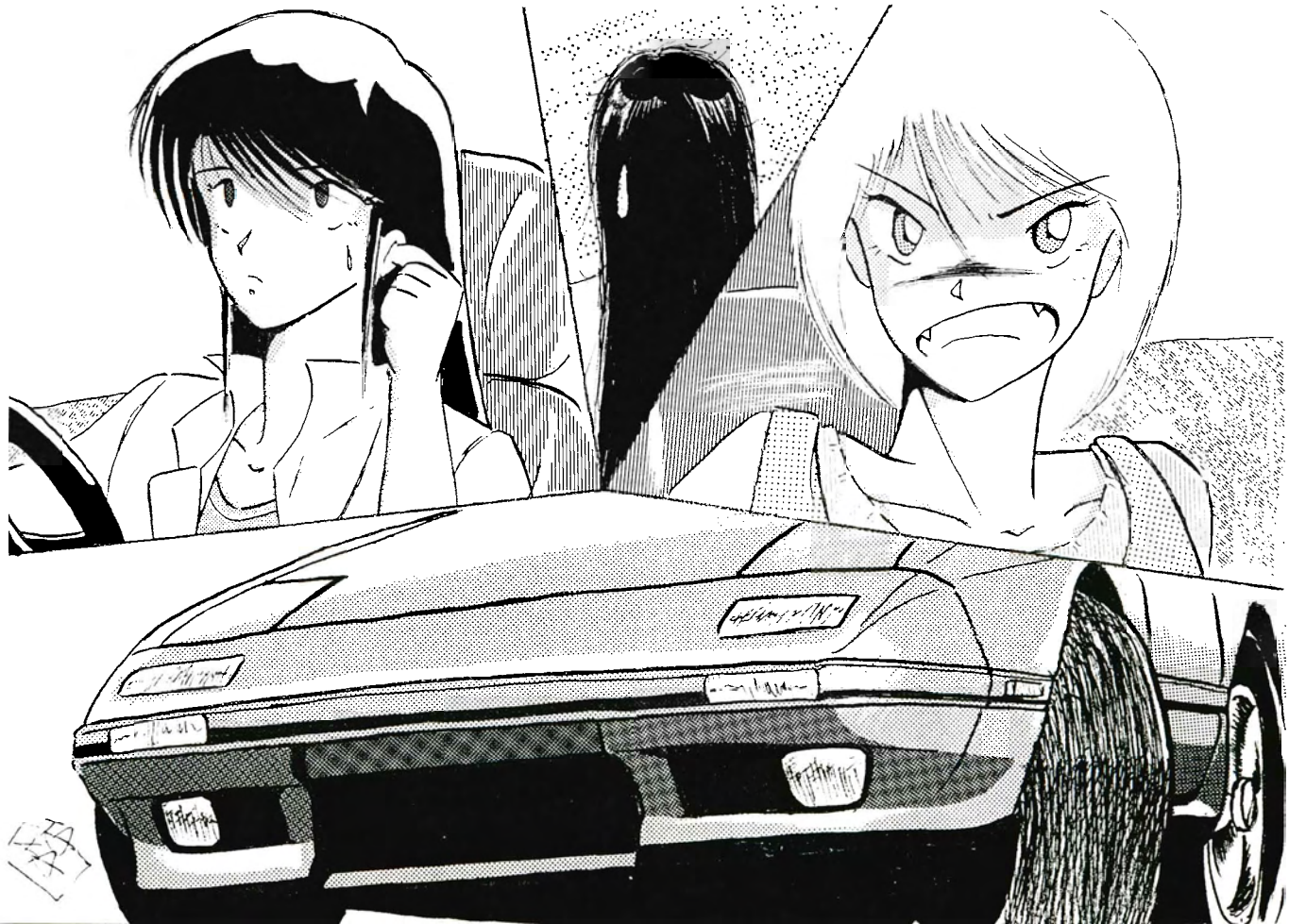
「天気、良くないね」
外を見ながらエミがぽつりと言う。確かに絶好のフライト日和には程遠い。まるで主任の心中をそのまま写し出したような曇り空。
「あたしらが仕事で飛ぶ時って、いつもそうだよね」
「おてんとさんに嫌われとんのや。俺ら日頃の行ない悪いよってに」
……何言ってんだか……

バカ話をするうちに、格納庫に着く。
格納庫のライトの明かりの中にたたずむ黒い怪鳥、コードネーム「スター・セイバー」。こいつが俺たちの愛機である。外見は２０世紀後半のアメリカ戦略空軍の使用していた「ロックウェルＢ－１Ｂ」をコピーしたようなスタイルをしているが、中身は全然別物だ。オリジナルのＢ－１よりも遥かに大推力の大気圏内／外用エンジンを４発装備し、可変後退翼との組み合わせにより大気圏内においてはマッハ２．７の最高速と戦闘機並みの運動性能を持つに至っている。その他にも色々と装備が有るのだが、それについてはそのうち説明できるだろう。
機外点検他、いつもの発進前のチェックを終えると、俺たち４人はそれぞれのシートに着いた。俺がパイロット、ショウはコ・パイ、エミが航法でジュンがエンジニア兼通信担当である。
『上空、一般機の機影なし。好きにやってくれ』
「了解。ユウ、好きにしていいって」
管制塔の奴等も昔は細かかったのに、最近じゃ上空に一般機が飛んでる時の他はこれしか言わなくなった。まあ確かに、臨時の時を除けばこの宇宙港を使うのは俺たちだけだし、気にすることはなんにも無いんだけどね。
格納庫から「スター・セイバー」がゆっくりとその姿をあらわし、滑走路の端のポジションに着く。可変後退翼を一杯に広げたその姿は、まさに巨大な怪鳥を思わせた。
「雲の中飛ぶのうっとおしいから、一気に行くよ」
あらかじめ言っておく。それでも後ろの二人は何をするつもりなのか判ってないみたい。ショウは判っているみたいで、「またか？」と視線で無言の抗議をしてくる。
「いいじゃない」とこっちも視線で伝える。あらかじめ言っておけば、あの二人の抗議もかわせる。
ショウの合意を得たところで（本当に合意したのかどうかは怪しいが）、俺はスロットルをアフターバーナー７０％まで押し込む。エンジンが轟音をあげ、ブレーキが推力に負けて機体が引きずられだす。
「ブレーキ、リリース！滑走開始！」
ブレーキを放した瞬間、全長４０ｍの巨体がドラッグスターばりの加速で滑走を始めた。とんでもない加速に、体がシートにめり込む。後ろの二人がなにかわめいたようだけど、この際無視。
「……Ｖ１！……ＶＲ！」
「Ｔａｋｅ　Ｏｆｆ!!」
声と同時にスティックを引いた。Ｆ．Ｂ．Ｌ．（フライ・バイ・ライト）を使用しているから重くは無いのだが、目然と力が入る。「スター・セイバー」は驚く程の短距離で滑走路を離れ、垂直上昇を始めた。最新鋭の現用戦闘機も顔負けのパワフルな短距離離陸＆ズーム上昇である。
「パワー、マキシマム！」
スロットルをアフターバーナー１００％に放り込む。４基のエンジンが咆哮をあげ、翼を閉じた「スター・セイバー」は黒い矢のように上空へと駆け登った。

何処かで、妖の潜れたような声が聞こえた様な気がした……

「ったく、あんたは人を殺す気なの?!冗談じゃないわよ！」

数回のワープの後、俺たちは惑星「ティラノス」に到着した‥‥のだが、予想どうりの展開だな、これは。一人で走ってるショウが羨ましいよ。
「ティラノス」の宇宙港に着いた俺たちは、そこから自前のトランスポーターに乗り換え、依頼者であるＵ＆Ｋカンパニー・ティラノス支社に向かったのである。
自前のトランスポーターは二台。まず、ショウが乗っているバイクが、アーモ・バイク「ゼータ」。ドニエラ重工が宇宙海兵隊向けに開発したもので、実用評価試験を兼ねてショウが使っている。で、残り３人が乗っているのが俺の自前で、１９９１年型ＭＡＺＤＡ・ＳＡＶＡＮＮＡ　ＲＸ－７　ＧＴ－Ｘという車。言うまでもなく、レプリカである。こんな古い車がオリジナルのままで今まで残ってるはずが無い。
話を戻そう。
「ユウッ！あんた人の話聞いてんのっ?!」
という訳で、さっきから俺はジュンの攻撃を一身に受けてるわけだ。後ろにいるエミは、ジュンの迫力に押されたのか、なーんにも考えてないのか、何も言わない。
「いつもいつも我慢してきたけど、もう許さないわよ！」
いつも我慢してるのは俺だよ‥‥‥
「人がおとなしくしてりゃいい気になって！このまましゃ、テロリストにやられる前に味方に殺されるわよ!!」
‥‥‥俺が殺されるよ‥‥‥‥‥
心の叫びを隠しながら、俺は車を走らせた。滅多なこと口にしようものなら、ほんとに殺されかねない。Ｕ＆Ｋに着くまでの辛抱だ。
一刻も早くこの状況から逃れたい。
その一心で、俺は車を走らせていた。
ジュンの怒りはまだおさまらない‥‥‥‥‥



結局、俺の苦しみの時間はあれから３０分後に終わりを告げた。
Ｕ＆Ｋカンパニー・ティラノス支部のビルがその姿をあらわした頃だ。
「ま、いいわ。続きはまた今度、ゆっくりやってやるから」
ジュンがそう言っといて、後からゆっくり文句言ったことなんて一度も無い。大体、仕事が終わると忘れてるもんだ。
一安心。

「お待ちしておりました。私、Ｕ＆Ｋカンパニー本社から派遣されました監査官のエドモンドです」
そういって、体格の良い、まるでスモウ・レスラーのような男は俺に向けて手を差し出した。
「Ｄ．Ｓ．Ｓ．リーダーのユウ＝アッシャーです」
俺も手を差し出す。
「早速ですが、依頼の件についての詳しい話に入りたいと思います」
そういってエドモンドは俺たちに席をすすめた。豪華なつくりのソファーである。
「事件の経過については御存じでしょう。我々としましては人命を第一とし、犯人側の要求は可能な限りのむつもりでいました。ところが四日前、我々の雇った交渉人（ネゴシェイター）の身に何かあったらしく、連絡が途絶えてしまったのです。そして、あなた方Ｄ．Ｓ．Ｓ．に依頼する前日、犯人側から一方的な連絡があったのです。「新しい人質を頂くから手出しはするな。手を出せば、支部長の命は無い」と。交渉（ネゴ）ラインがきれているために犯人側との交渉もできませんし……」
「で、俺たちに話を持ってきた」
「そういうことです」
なぁるほどねぇ。ネゴ・ラインがきれてるってのが厄介だが、新しい人質が要るって事は、もしかすると……
「で、新しい人質ってのは？」
「おそらく、支部長のお嬢さんでしょう」
そういや、一人娘がいるって話だったな。
「でも、判ってるんなら話は簡単でしょ？」
「はあ……」
エドモンドは困ったような顔をした。何かあるらしい。
「手を出すと、支部長が危ないから？」
「いいえ、それもあるのですが……」
エドモンドはジュンの考えをやんわり否定しながら言った。
「実はその……お嬢さんは、かなりの男嫌いでして……」
……なぁるほどねぇ……
ま、いいでしょ。うちのチームにはジュンとエミがいるわけだし。普段はこの二人に任せりゃいいわな。
その旨を話すと、エドモンドはほっとしたようだった。
と、唐突に背後のドアが開いた。
「エドモンドさん！何度言ったら判るんですか！ボディガードなんて要らないと言ったでしょう」
なるほど、この声の主が支部長の娘さんか。確かに気の強そうな声だ。
「大丈夫ですよ、お嬢さん。今度のボディガードチームには女性の方がおられます。その方がガードしてくださいますから」
エドモンドがなんとか機嫌を取ろうとしている。ここはリーダーとしての立場ってもんがある。
俺は振り向き、一歩踏み出した。
「今回依頼を受けましたＤ．Ｓ．Ｓ．のリーダー、ユウ＝アッシャーです。犯人グループが次に狙っているのはお嬢さんです。我々は支部長の救出と共にお嬢さんの身

柄の保護も依頼されました。この両方を成功させるためにはお嬢さんの協力が是非とも必要なのです」
少々、演説くさくなってしまったが、ここまで言われて断わるやつはそうそういやしない。なんとか協力してくれるはず……
娘さんは、うつむきかげんのまま口を開いた。心なしか頬が紅潮しているような気が……ま、まさか……
「わかりました……全てお任せ致しますし、協力もさせて頂きます」
彼女は顔をあげ、こういった。
「よろしくおねがいします……おねえさま♡」
「……∧……」

そういうことだったわけね。
嫌な予感はしてたんだよ……
こういうパターンは多いんだよ……

背後で、連中が声を殺して笑ってるのがはっきりとわかった。
彼女は、うっとりとした目で俺の顔を見つめている。

前途多難……

<第一話　完>

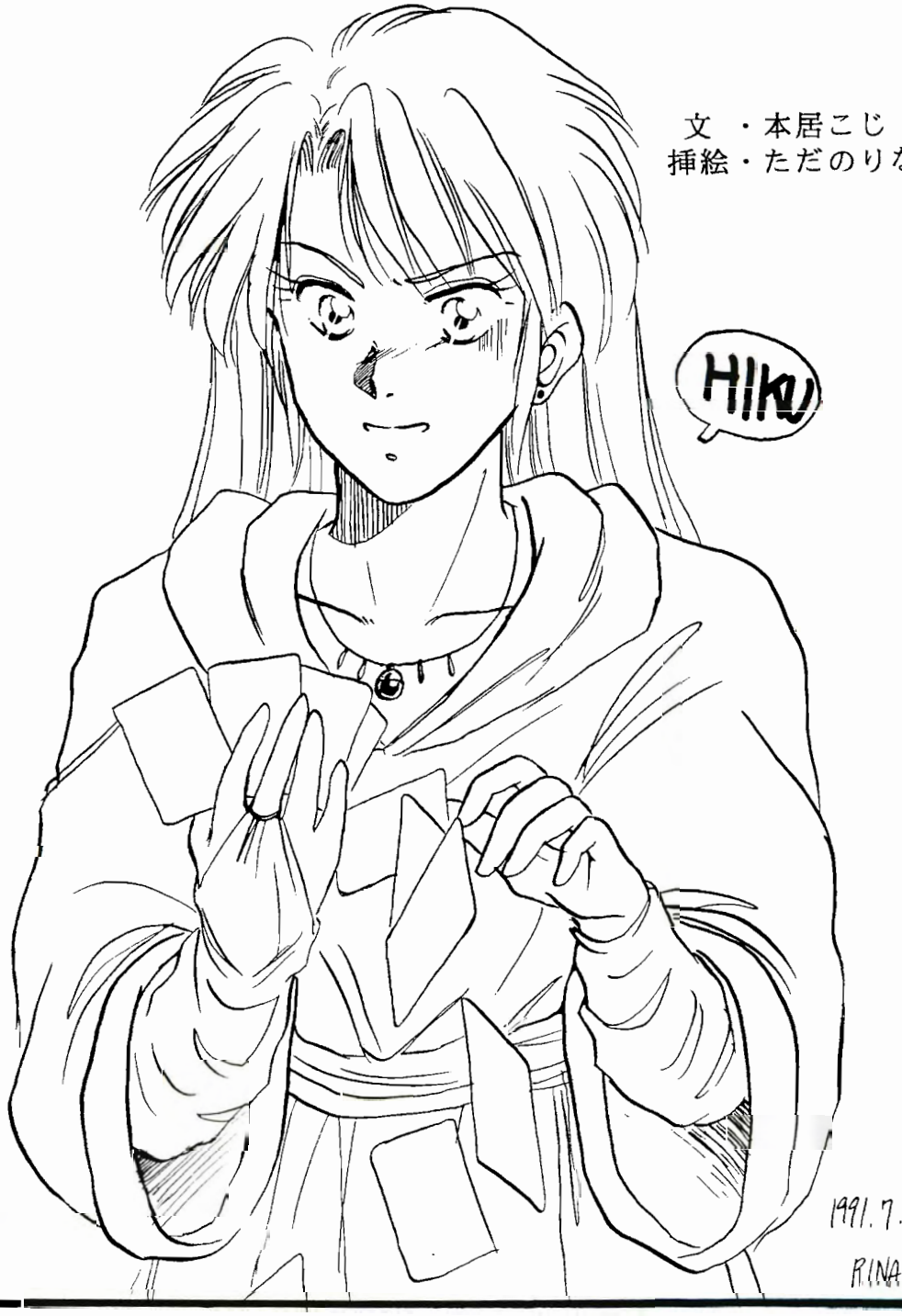
突発コラム

空技廠スタッフを飛行機に例えると

空技の人間は、大概飛行機が好きである。そこで、私の独断と偏見により、本部の連中を飛行機に例えてみた。
菊地は簡単だ。自分でもよく言っているが、ＤＣ－４である。ケンカは得意ではない。敏捷性も劣る。考え方に古いところもある。ただし、必要な事務処理だけは確実にやる。空技の頭たる所以でもあるが、その実直性が正にＤＣ－４に相当する。なお、これは長距離レシプロ輸送機のベストセラーである。
次に、長船。これは震電だろうか。竹刀を持たせれば空技一だが、やはり思考回路が古い。一応私と並んで空技のナンバー・スリーである。ナンバー・ツーは宇垣だが、こいつはライトニングに他ならない。「イギリス人と物好きな奴が好きになる」という表現が適切にあてはまる。今のところ菊地と気が合うらしいが、その物好きさ加減がまた同機によく似合っている。思考回路も短期決戦型だし、若干古い。
香津美。こいつはスコシタイガーだろう。有体にいえば、「中途半端」。可もなく不可もなく、と言ったところで、‥‥これ以上言うと長船に殺されるので、やめておく。
永平寺。この野郎はＡ－６に違いあるまい。「空技のソフィスト」とも呼ばれる彼は、必ずどこか本筋を外した論法で相手を挑発し、叩きのめす。長船と論争になると必ず乱闘になるか千日手になるかのどちらかなので、誰かが仲裁で迷惑することになる。今は長船が上方に行ってしまっているので、矛先は常に我々に向けられる。時には全員が対象にされる。早いとこ「お山」に上ってほしいところだ。
最後に残るのが私だ。私は‥‥トムキャットに決まってるじゃないか！と、言うのは冗談として。実のところ、トラッカーなんじゃなかろうかと思っている。常に観察者側だし。自分から攻撃することはめったにないが、アラ探しは大好きだし。人のことをとやかく言っといて、自分も思考回路古いと思うし。
以上、会長から受注した「穴埋め用半ページ急造コラム」でした。（ちゃん）[2]。
（文責・岬当麻）

MENTAL RANGER

文・本居こじ
挿絵・ただのりな



今回までの粗筋
　小さな宿場町で居酒屋を営む司祭補ミラマー・レキシントンは、ある日、黒魔術を使い生贄を集めている謎の女術師の噂を聞く。事実確認に乗り込んだミラマーだったが‥‥。

２（承前）：「貴様があのミラマーか‥‥」リュルカは声も丸きり変わっていた。今までの少しクセの有る静かな声はどこかへ去り、今や地獄の底からするような、低く、圧迫的なだみ声に変わっていた。「そうと解れば遠慮は無い‥‥邪魔な物は排除するのみ！」
「何と！」
「グエン・ビエン・タン・ソン、ニュット・タリィホゥ・ホイーラー‥‥ビザン・アラメダ・アネクメェネ・アンティタム、異教徒ミラマーを異なる世へっ!!」
「されて、たまるかっ！」
　ミラマーが斜に御幣を振り、リュルカの「力」とぶつかった「力」が文字通り火花を散らせた。
「破つ！」
　リュルカが気合いをかけた。‥‥ミラマーの姿が、その瞬間、消えた。
「転移したか‥‥」リュルカはもとの声に戻ってそう呟き、机に手をついた。汗があごを伝い、机にたれた。「いずれ決着をつけねばなるまいな‥‥」

３：蒼ざめた表情のミラマーが茶店に戻ると、「紫」の魔女で、ミラマーの所に居候しているキサラ・ミレニアムが驚いて、彼女のもとに走り寄った。
「どうしたんですか‥‥一体!?」
「別に‥‥久しぶりに骨のあるのとやり合ってきただけだ！」ミラマーは力無く笑いながら差し出されたキサラの手を払い、食卓の椅子に座り込んだ。
「熱めの渋茶を一杯くれ」
「‥‥はい」

　キサラの淹れた渋茶を飲み終えると‥‥彼女は立ち上がり、既に閉まっていた店の方へ入っていった。
「なんだ、もう閉めてしまったのか」ミラマーは箱から茶の葉を一つまみして鼻先でこすりあわせた。淡い芳香が、ミラマーの頭の疲れを揉みほぐしていく。思わず溜息が出た。
「あ」キサラがそれに気付いて、泡を食ったように駆けよった。「何やってるんです、お茶は貴重なんですから！」
「よいではないか、まだたくさんあるのだから」
「そんな！」
　キサラがそうまで言ったときだった。突然、ミラマーの足元でボッ、と土埃が立ち、それが消えるとそこには黒い羽根が落ちていた。
「何ですか、これ‥‥新手の手品ですか？」
　キサラがかがみ込んで、それを拾おうとした手を、慌ててミラマーは払い除けた。
「キサラ！『紫』の術を修得していながら、これが何だか解らんのか？呪いがかかってることくらいわからんか！」
「まあ！」今更のように、キサラは悲鳴を上げた。「そういえば‥‥！」
「まったく‥‥」ミラマーはボヤきながら御幣を取り出して、邪気と呪いを祓い、指先でつまみ上げた。「‥‥にしても何じゃなこりゃ‥‥？」
「ちょっと私に見せて下さいな」キサラはその羽根を受け取るとかなり丹念に調べ、解説した。「これは『黒い術』で、『復讐』を意味する暗号ですよ」
「ほほう‥‥」ミラマーは目を細めた。「宣戦布告、という訳か」
「そういう事になります‥‥本当にミラマー様、一体何をなさったんです？」

４：そして、何も無いまま幾日かが過ぎた。ミラマーたちは、わざわざ事を荒立てるような事はせず、できるだけ力を蓄えておこうと、何もしかけることは無かった。そして、リュルカからも何も仕掛けてはこなかった。
　全ては、いままでとまったく同じ、平穏な日々だった。

　さらに幾日かが過ぎた。呑ん兵衛のアーレイ・バークが、まっ蒼な顔でミラマーの許を訪れた。彼は昼も夜も町のどこかの酒場で金が続く限り呑み明かし、金が尽きればどこかへ出かけ、そして金を得て帰って来るとまた呑み

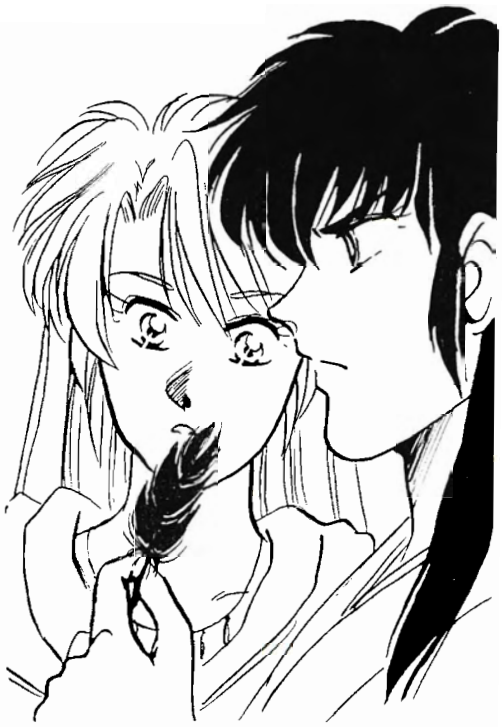
明かす、という生活を送っていた。にわか冒険者の為に開かれたワルトハイム王リチャード２世のいかさま洞窟へ行って賞金を稼いでいるのだろう、というのがもっぱらの噂だが、本当の事はバーク自身口にしないので解らなかった。
「何の用だ、バーク」ミラマーは漂う酒の臭気に顔をしかめて言った。「ここに酒は無いぞ。茶なら有るが」
「いや‥‥」バークはうつろな表情で、ゆっくり言った。「てェへんなこった‥‥あ‥‥ミラマーの姐え‥‥」
「“姐え”はやめないか」ミラマーは後れ毛を掻き上げた。「‥‥まぁ、何があったのか、話してみよ。できるだけの事はしてやろう」
「ありがてぇ‥‥」バークの顔が心持ち緩くなった。「ヤンセンの店を叩き出されたんだよ‥‥ひでぇ店だ‥‥金は払ったってのに‥‥」
　どっちがひどいんだか。ミラマーは思った。ヤンセンの店はただの定食屋のはずだ。
「で？」
「家に帰ったんだよ‥‥‥‥そしたら、戸が開かねぇ」バークはそこで、深く溜息をついて、部屋中に酒の臭気をバラまいた。「お茶でいいから、なんか飲む物くれよ」
　辛抱強く、ミラマーは失望感に耐えて、キサラにこぶ茶を淹れさせた。
「で、まぁ‥‥仕方ねえってんで蹴り破ったんだよ、ドアを」よほどの安普請だったな。ミラマーは思った。
‥‥突然、バークが激しく震えだした。
「あぁ‥‥！」

ジャランッ！

　ミラマーは今まで左脇に抱いていた錫杖で床を一突きし、上端の金輪を激しく鳴らした。簡単な、恐れを取り除く術だった。‥‥そして、一喝した。

「どうしたかぁッ！」

　ブルッ！とバークは体を震わせた。
‥‥彼は正気に戻った。
「すまないね」
　バークは頭を掻いた。
「とにかく続けよ」
「あぁ」バークは、しばらく考え込んで、口を開いた。



「家中がな、気が遠くなるほどの量の、ホコリとカビ‥‥キノコも有ったかな‥‥に埋もれてたんだよ」
「で、まさか私に掃除の手伝いを依頼に来た訳ではあるまいな？」
「いや、そんな」バークはぽりぽりと、シラミの宿った頭を掻きむしった。
「ところで‥‥今は何月の、何日だい‥‥？」
「リチャード２世王が大政をとられてから３年目、９月、１５日」
「何と！俺が出掛けてから１週間しか経っておらんとは!!」バークは大げさすぎる程驚いた。「ヤンセンもそう言ってたが‥‥俺はてっきり、４年目の５月１０日かと思ったぞ！」
「何故だ？」ふと気がついた事が有って、ミラマーは急に真顔になった。
「２日前にも、行商の茶売りが同じ様な事を言っていた。何故だ？何を根拠にそんな事を言う‥‥？」
「そりゃ姐ぇ、おいらが旅に行ってる間に、お日様が少なくとも２００と７０回余り昇ったからだし、ここに戻って来る前に、ベロースの町で確かめたからだぁね」
「そんな馬鹿な！」今度はミラマーが驚いた。「貴様が出掛けたのは９月の８日らしいが、まだそれから７回しか日は昇っておらんぞ！」
「あの」キサラが部屋に首を突っ込んだ。「話が店の方に丸聞こえですけど」
「‥‥すまない」
「時間のことでもめていらっしゃるようですが‥‥私、以前にこんな事を聞いたことがあるんです」
「どんな話？」こめかみを揉みながら、ミラマーは聞いた。この際どんな話でも、この問題の解決の糸口になりそう

に見下境と廊たけらいすて心っにめ受な聞でし
いてよう始をはらうそた。
たみちよし義てかそ。し対きてをる話講し匠だ
聞し方えりのを師んい話物でた者はにをす。
も話の見く術方、なつら私うれの男時きです
でし店がっ魔いて話をがりそらそ…る撤ん？」
ん少は店ゆで使し実息ななたけ、…或水たす…ね聞に水を進は
な「ラをと院なと。、しかいつで。、がっまやる首に分っ術尋すも、」けね
ら。サ子る学う訓す度だ、が傷けすで性かいじ恐にと自ゆのがでで？よゃ」
た。キ椅く、よ教で一いに士をだで。女か思んはかも、をそーん「て「じ？自遅間かた共したうら応う…やよ躍るたれ結
ない」のてはのうんは思所術物たうでるにとたク静をで間、マな。し。んでのて時をいをらはそががよ…とた飛とっすにいみえす
とてあ用っれこいな女つるいのれそます杖たしー、間上時はラうたうたた術心せ、水て身ホれ…な話のず士しをを張く更いんまれミそにず
こっは番持こ、とと彼づ或強分らだ供恋のし殺バは、時た、でミそいどっめ魔肝わに、っ自アそ…みのどま術でけブを遅、ばそたそ」し時ま
な「店に「時いこ し「が自れん子に彼う「 ラ「しに「 「ず「言進黒「合事てな分「「「込こ『「の日だチ界をばれ「は「るもたは
なな「ない」とてこいたきれ聞も話でんん「きてをる話講し匠だ
ちた。キ椅く、よ教で一いに士をだで。女か思んはかも、をそーん「て「じ？自遅間かた共したうら応う…やよ躍るたれ結
ない」のてはのうんは思所術物たうでるにとたク静をで間、マな。し。んでのて時をいをらはそががよ…とた飛とっすにいみえす
とてあ用っれこいな女つるいのれそます杖たしー、間上時はラうたうたた術心せ、水て身ホれ…な話のず士しをを張く更いんまれミそにず
こっは番持こ、とと彼づ或強分らだ供恋のし殺バは、時た、でミそいどっめ魔肝わに、っ自アそ…みのどま術でけブを遅、ばそたそ」し時ま
な「店に「時いこ し「が自れん子に彼う「 ラ「しに「 「ず「言進黒「合事てな分「「「込こ『「の日だチ界をばれ「は「るもたは

着は、触た女かがど
執彼はい、密のは
る、にてんのた彼
で時しろ分い…
すり、殺ち自て…
対。し
をも、し
す。
戻う
によ
前るす」
れでの…」
からん方
かみた。
のてっかけたの
ェい振がよめ黒
ラ水はよい
サ局クるか
キ結ーれの
ばらぇ
ね」
サ
ラ
「な」にり、
うたうくを、
くっそっ
無か議ゆ時”
力か思に“
はは不う？
に
“時”悪よ無とす
時にに女で付かはこす
更と憶彼ん毒いラので
の。こ記はたはなサ回ん
そ。たう度っーはキ今う
も、でっい今ままで」「思
もん戻とはしラ話…」と
きたにた彼てミい…た。る
動っとれ、し」笑らいき」
のなもらで殺！のし呟で？ラあ自にめでいの
分くがけ。にいだか、用にミり。的た上ば界
い。
いっく自
」た。
」え
も、
『闇』8ドア結みえす
『月のーシに進言く
9ピニ囲のと早
スイ周間っを
か、
は達にの時もみ
誰の上手分の。進
がたの相自外す。の
様き術て、ので時
ーてのめはそ訳の
マっ分高に、い中
ク要
バー
」
力がたい
し当こ
（続）
で「なはだ勝」
きこり心とち
るり高のす呂
のゃい中れは
かすレでばない。
いげベ舌
！」！えルう今
！」！とち度「
事たはマ通ま…
が。かーりず…
ばれ
ばれ

Ｓｐｒｉｔ ｏｆ Ｗｈｉｔｅ Ｂｅｌｔ―――特　口　魂―――
菊：さて、２号やね。
岬：「ひいじいさんの５０回忌」、お疲れさん。
菊：何だ、いきなり‥‥お前まだ信じてねーな。
香：麻美が同じ時期に姿消したもんね‥‥
（菊地、ハニワ化（註１）する）
宇：‥‥違うってば！私はタダの風邪。
岬：この時期に！
宇：夏風邪！
菊：ムキになるとこが怪し‥‥ってか？
香：墓穴掘る気？
菊：だー！‥‥百里はどうだったんだ、百里は！
香：百里って？
岬：空自の基地。一朝事あらば霞ヶ浦が二つに割れて、湖底の秘密滑走路が迫り上がるという‥‥。（一同爆笑）
香：空中合体とロケットパンチは？
岬：あるある。もう何でもアリアリ。
菊：ムハメッド・アリ？（一気に冷める）‥‥あり？‥‥インドの民俗衣装‥‥
宇：そりゃサリー！穴深くしてどーすんの！
菊：どこの穴？（香津美、爆死）
宇：もう勝手にして。女性読者もいるんでしょ？
菊：‥‥そりゃ、まあ、そうなんだが‥‥。おや、百里だ百里！第二ラウンドはどうだったんだ！
宇：ああ、あれ！あれ中止。厚木に変更。
菊：なんだ、つまらん。
宇：そりゃ私だって、お金持ちじゃないもん。（註２）
菊：で、何か撮れたか。
岬：Ｐ－３Ｃ、ＵＳ－１、ＳＨ－３、Ｆ／Ａ－１８、ＥＡ－６Ｂ‥‥
香：わぁ、すごい！一枚ちょーだい。
宇：全部パァ。イワゲンのタコ（註３）が、フタあけて‥‥。
菊：っタコ！
岬：だーら事故じゃねーか、ありゃ！
香：どうしたっての？
菊：落とした。
岬：当た～り～、ドンドンドン‥‥って、俺か。
香：弁護の余地なし。
菊：同感。だからストラップを手にかけて巻き付けろって‥‥
岬：だって暑かったから‥‥
菊：大したこっちゃねーだろーが!?
宇：判決。私のヒールをおなめっ！（註４）
岬：たァすけてくれ―――っ！（註５）

註１：別称、○ッ○○イフ化。
註２：そのワリには毎週どこかに行っているが？
註３：岬のこと。
註４：言うまでもなく、冗談である。宇垣にＳっ気はない。
註５：彼の方はわからない。「レビア巡査部長（勝手に決めている）になら鞭で百叩きされてもいい」と公言してはばからない昨今である。

後　記

菊：あ、暑い。死ぬ。たぁすけてくれ―――っ！
宇：飛行場周りは、ひとまずお休み。暑くて。
岬：こないだ宇垣と厚木へ行った。燃え尽きた。
長：金がない＝寄席に行けない。がっでーむ！
香：スコシタイガーって何だろう
　　スコシタイガーって何だろう
　　岬君は知っている　麻美さんも知っている
　　スコシタイガーって何だろう
　　スコシタイガーって何だろう
　　何だろうったら
永：来年度には休学してお山に上る。決めた。
た：１７～９日に函館行ってきました。半分研修（のハズ）。やっぱ夜景はキレイ♡さすがNo.３だわ。（私信より勝手に借用…失礼）
晃：創刊号からのハズが第２号からに‥‥何はともあれ以後４６４９！（←超ド級死語）
孝：祝！マツダ７８７Ｂルマン２４時間耐久優勝!!ロータリーの戦士たちに、乾杯!!

Staff
編集長：菊地研一郎／編集員：宇垣麻美
永平寺九頭龍／筆者：長船吉光　本居こじ
Ａ．Ｆ．フィネクスレイ　晃孝秀一　岬当麻
香津美どぶろく／絵：EPST DARIUS･5　孝行始
ただのりな　（脱稿順）

Ｂlowers　第２号
第２巻第２号（通巻３号）
平成３年８月１日発行　　代価３００円
（送料別）
編集人・発行人　菊地研一郎
発行所・印刷所　「空技廠」

※「Ｂlowers」は（同）「空技廠」の登録商標です。（←ウソ）
※本誌記事の一部または全ての無断使用を禁じます。（←マジ）

今月の表紙
「カルラ舞う！」より、剣持 司
　　画　・ただのりな
　　題字・ＥＰＳＴ　ＤＡＲＩＵＳ・５
今月の裏表紙
「沈黙の艦隊」より、一コマ
　　発案・岬当麻（版権大丈夫か、オイ）
次号は９月うちに発行したいと思いますが、
まあ、まず無理でしょう。